

ベルジャーエフのナロード観（承前）：（ナロード とインテリゲンチャ）

青山, 太郎
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4267>

出版情報：言語文化論究. 2, pp.15-22, 1991-01-31. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

ベルジャーエフのナロード観（承前）

（ナロードとインテリゲンチャ）

青山太郎

V

ロシアのナロードは果して有機的・創造的生を営んでいるか。そこには不断の創造を可能にする国民的統一が見られるか。ベルジャーエフはそこにおける有機的生の欠如ゆえに、ロシアを根本的に病める社会と見る。ロシア社会には久しい以前から、ナロードの神秘的・原初的な社会との乖離が存在する。そこには既に有機的発展はありえない。ロシア社会の内には数十年にわたり否定の精神が蓄積され、愛ではなく憎しみが、創造的理念ではなく無神的・ニヒリスチックな理念が人々を鼓舞している。ロシアの歴史的国家権力は帝国主義の偶像に跪き、支配階級の欲望に仕え、稀な例外を除いてナロード的ではなく、その結果インテリゲンチャに代表されるロシア社会はロシア国家に背を向け、これに背を向けること自体の内に自らの名誉と存在理由を見るようになり、ロシア人としての市民感覚を喪失した。ロシア・インテリゲンチャは国家に背を向けたばかりではなく、それと同時に有機的統一としてのロシア・ナロード、ロシア・ナーツィヤにも背を向けてしまったことに気づかなかった。ロシアに対する彼らの態度の内からは、ロシア史の有機的伝統に対するよい意味での保守主義が失われた。真の意味でのラジカリズムは真の意味での保守主義と結びついているべきものである。「保守すべきものを何ひとつ持たないナロード、愛に価するいかなる遺産も受け取ら

なかったナロードは、存在しえない」（『インテリゲンチャの精神的危機』49ページ）筈のものであるから。有機的成長のみが発展たりうる。よき意味での保守主義を喪失し、伝統を悉皆拒否するところに有機的発展はありえない。インテリゲンチャが権力から離反したことの内には彼らの真実があった。しかし一切の過去との、歴史との訣別を自らの生活のノルマとしたことの内に彼らの虚偽があった。ロシア・インテリゲンチャの文化創造との断絶、すなわちロシア文学・ロシアの哲学的思惟との断絶と、ロシア・インテリゲンチャのロシア・ナロードとの断絶、すなわちナロードの信仰・国民感覚との断絶は、所詮同じひとつの断絶にすぎない。

40年代のスラヴ主義は、この否定的・離反的理念の成長を有機的理念によってくい止めようとする試みであったが、そこにあっては国家権力としての専制ロシアと国民的有機体としてのロシア・ナーツィヤの区別が十分明確になっていなかったため、専制ロシアに対しあまりに譲歩しすぎ、のちにスラヴ主義が反動的ナショナリズムに墮する芽を蔵していた。

40年代においてスラヴ派と西欧派が未だ共通の言葉を有し、共にロシア文化の精華を体現していたのに対し、60年代は、この文化の有機的統一崩壊の上で顕著な一步を踏み出したものである。ゲルツェンは高度の文化の所有者であり、彼には未だ全ロシア的・全人類的文化の感覚があった。チェルヌィシェフスキーに既にこれはない。同じことがホミャコ

フとのちのナショナリストたちについても言える。スラヴ派が反動的国粹主義へ変貌を遂げゆくと同時に、西欧派の急進部分は革命的離反と、文化の低下を伴うニヒリズムの道をまっしぐらに進んだ。両者の間には「国民的統一のみならず、人類としての統一の意識すらも失われ、革命的と反動的という二つのイデオロギーをますます隔てゆく深淵は、権力と社会を隔てる深淵に呼応する」（同上、87ページ）。権力と社会の反動部分は苛酷にインテリゲンチヤを迫害し、地下に追いやり、彼らの離反の感情を尖鋭化させることにより、統一体としてのナーツィヤ崩壊にますます拍車をかけた。断絶、離反、相互の無理解、敵意は成長し、権力と社会は憎み合った。インテリゲンチヤ的世界観、伝統的急進主義のニヒリズムの理念は、反動によって培われ、また自ら反動を培っていたのであり、病める国民的有機体に端を発し、またこの有機体の病いを促進していた。有機的統一体たるべきナーツィヤの、革命と反動へのこの分裂の内、ロシアの不幸の根源がある。

この一種独特なインテリゲンチヤ階層は旧体制の歴史的犠牲者であり、そこには過去の隷従と闇が奇妙に反映しており、その根無し草の性格は、権力と社会上層階層の罪にその土壌を有する。思うに、インテリゲンチヤ的プチブル層は、その内的空虚さ、一切の創造への無力という点で支配官僚階層と軌を一にし、どちらもナロード有機体の瘤腫であり、どちらも自分を地の塩と思いこむばかりか、ナロードの生活を損う権能を有すると自惚れている。（『インテリゲンチヤの精神的危機』、66ページ）

専制ロシアとロシア・インテリゲンチヤ、実生活の上での抑圧と思惟の内なる抑圧、上からのニヒリズム、すなわち地主的・官僚的ニヒリズムと、下からのニヒリズム、すなわ

ちインテリゲンチヤ的・ナロード的ニヒリズム、ロシアはこれら二つのニヒリズムを同時に乗り越えねばならないのである。

VI

有機的統一体としてのナロード、ナーツィヤとしてのナロードの姿は、専制ロシアによってはもちろんのこと、インテリゲンチヤによってもかつて捉えられたことはなかった。実証主義的唯名論に毒されたインテリゲンチヤは神秘的理念としてのナロードの理念を否定したがゆえに、有機的ナロードの生活から切り離されることによりかえってナロードとの結合を渴望しつつ、その際ナロードの名の下に特定の階層、農民ないし労働者を考え、これらあるがままの特定階層を理想的ナロードとして跪拝する以外になかった。ここにロシア・インテリゲンチヤに特有の奇妙な逆説がある。彼らは私生活においては無欲であり、社会的栄達を欲せず、殆ど宗教的とも言える禁欲によって自らの物質生活を律するが、同時に彼らの理想主義的夢想は万人の私欲と、万人の物質的飽満と結びついている。彼らはナロード大衆の諸本能の前には一も二もなく跪く。他人の利益、プロレタリアートの、あるいは農民階級の利益が彼らの理想となった。「ナロードの中へ」出かけてゆくナロードニキにとっても、プロレタリアートに階級意識を吹きこまんとする社会民主主義者にとっても、究極のところ、「ナロードの利益と本能に仕えることが真実と愛に仕えることであるという理念以外に、いかなる理念も存在しない」（『インテリゲンチヤの精神的危機』、67ページ）。しかしベルジャーエフによれば、「それへの跪拝がそのまま真実にほかならないような利益・社会的特質が存在するというこの不幸な考え」（同上、67ページ）、何よりも先ずこの考えからインテリゲンチヤは癒されねばならない。一特定階層の意志を

そのままナロードの意志として絶対化することは、有機的理念体现者としてのナロード開示の道とは正反対のものであり、悪しきアナキーと権力崇拜に行き着かざるをえない。あらゆる階層・階級は、その排他的自己肯定と自己過信において、善ではなく悪を生む。いかなる一特定階層・一特定階級にも望みを託すことはできないのであって、救いはまさに一切の階級的敵意を越えることの内にこそ求むべきである。普遍的・全人類的・全ロシア的視点に立つことを不可能にしたこと、かかる視点の抹殺を意識するとしないとにかかわらず心がけてきたこと（ナロードニキの場合にはどちらかといえば無意識的にであり、マルクス主義の場合は意識的にである）、ここにインテリゲンチャの誤りがある。

唯一の大きい理念に滲透されたナロード、超人間的統一体としてのナーツィヤは、常に個別な集団の自己否定を、私利の制限を前提とする。社会集団による自己肯定の克服、一切の限られた社会環境を越えることの内に希望が存する。農民の裸の私欲の内にはナロード的なもの、客観的なもの、高次の真実に従うものは極めて少ない。貴族の裸の私欲の内にはさらに少ない。（同上、69ページ）

インテリゲンチャのニヒリズム、すなわち実在の意味への不信、善と悪の絶対的峻別への不信、そこから生れる非創造性などが、誤ったナロード跪拝を媒介として農民および労働者の暗い本能と結びつく時、そこには何かしら一揆的なもの、純粋にナロード的な一揆ではなく、強度のインテリゲンチャ的混ぜ物の入った一揆が生れる。「官僚主義はナロードの生活を損ったが、インテリゲンチャはナロードの思惟を損った」（同上、92ページ）のである。

あるがままの、大衆としてのナロードに対

するベルジャーエフの態度は決して甘いものではない。彼によれば、大衆は有機的理念によってのみ生きうるのであり、批判的な、純粋に否定的な理念は、大衆によって通俗化されることにより崩壊へ、虚無へ行き着く。諸々の価値の転換を試みる批判的理念の内には大きいなる真実がある。しかしそこに蔵された批判的なもの・反抗的なものは、最良の人々の体験からその意義を得、悲劇的な個人のドラマによって正当化されるのであり、このドラマを支えるものは、これら思惟の英雄たちが意識して、あるいは意識せずして依拠した肯定的価値である。文化の精華に属する人々によって生き抜かれるこの個の反逆、貴族主義的否定精神のドラマ、文学の内に反映されるこの複雑なドラマを、ナロード大衆は生き抜けない。個人の苦しみの中に獲得された批判的価値転換は、大衆の内に肯定的有機的諸理念と結びついてのみ入りこみうるのであり、マスとしてのナロードは個々の探究者が経た試練を経ずして、古い宗教形態から新たな、より豊かな宗教形態へ移る。

しかしこのことはベルジャーエフにおける大衆への蔑視、個人主義的離反と孤立の是認を意味するものではない。自らを超えた聖なるものを斥け、自己のみを肯定し神化する大衆を、信ずることはできない。歴史はそれを教える。しかし自らの意志を神の意志と結びつけた大衆、「そこにおいてあらゆる部分が高次の中心に従い、また部分同士がヒエラルキックな結びつきを保持しているような大衆」（同上、73ページ）、すなわち神秘的有機体としてのナロード大衆を熱烈に愛することはできる。ベルジャーエフにとって人間を愛するとは、あるがままの人間をあるがままに愛することではない。これは所詮実行不可能なことだ。人は他者の内なる神の似姿を愛するのである。人間の内にあって信じるものは神の似姿であり、愛は人間を超えた神との結びつきによってのみ可能となる。

われらのナロード、そもそもマスとしてのあらゆるナロードは、かつて宗教的にしか生きなかつたし、また宗教的にしか生きられない。いかなる唯物論も生活の高次の基礎、高次の裁可への彼らの要求を満たすことはできない。社会民主主義者をはじめ唯物論的基盤に立つ革命家たちは、ナロードの中へ行って階級的利害を説いたが、これはナロードの宗教的本能によって受け容れられず、野蛮な放縱のみを生み、最後には反動に、開放思想への幻滅に行き着いた。(同上、150ページ)

VII

ベルジャエフの思い描くあるべきインテリゲンチャ像は、回復された有機的統一体としてのナロードの概念と切り離せない。ロシアにあってインテリゲンチャと呼び慣わされている階層、主として六十年代にその発生を見た階層は、ナロードから乖離しこれと対立しているが、かといってそれは天分と才能、高度の知性と意識の階層でもない。インテリゲンチャなるこのサークル的特殊集団への所属は、特殊な社会的心理傾向によって決定されており、そこにおける知性と才能の水準という点から見れば、この階層の精神的貧寒さにはおそるべきものがある。彼らは最良の人々とナロードの宗教的飢渴、ロシア文学・ロシア哲学の内に現れたかの飢渴を理解しえず、有機的社会発展を推し進めることにかけてしばしば無力である。あるべきインテリゲンチャとは、離反的叛逆意識に凝り固った特殊な一階層ではなく、より高次の知性と意識によるナロードの意志の表現にして精華として、文化創造の荷い手たるべきものである。真のインテリゲンチャとは、有機的統一体としてのナロードの天分であり知性である。こんにちのインテリゲンチャは、その文化創造との断絶において天才たちに、また伝統的国

民文化との断絶においてナロードに対立している。しかし歴史を創り文化を創造するのはナロードと天才であり、天才すなわち真のあるべきインテリゲンチャとナロードの間に対立はないのである。なぜなら、あらゆるナロード＝ナーツィヤは自らの精神の正確な反映を、すなわち自らの高き資質、高き道德意識、知性、天分、知識、正義等の体現を天才の内に有する筈のものであり、また有さねばならないからである。そしてかかる意味でのインテリゲンチャは、新たな、ナショナルな意識の土壌にのみ形成されえ、確立されうる。

ナロードの理念を専ら下層の被抑圧階級に結びつけるという虚偽と先ず手を切らねばならない。ナロード＝ナーツィヤの正しい理念を回復させるにはこれが不可欠である。

ナロードおよびナロード的眞実の理念は客観的なものであり、いかなる人間的地位や社会的特性にも依存せず、それが貧困、抑圧、出生の平民たることなどによって保障されるものでないこと、富、権力、出生の貴族たることによって保障されえないのと同様である。私欲を超えた客観的眞実を自らの内に受け容れる人間は誰でもナロードの一員となるのであって、彼が貴族か、プロレタリアートか、雑階級インテリгентかは何ら問題とならない。プロレタリアートないしインテリゲンチャの似而非貴族主義は、貴族ないしブルジョアジーの似而非貴族主義同様忌むべきものである。(同上、70ページ)

ロシアの貴族階級はかつて先進的階級であった。ロシア文化はこの階級に多くを負っている。しかしその場合彼らの文化的貢献は常に彼らの階級としての自己否定によって、全ナロード的・全人類的理念への服従によってなされた。すなわち、自らの階級の限られ

た視野を越え、階級的私欲・私心を克服することによって、彼らは文化創造に参画しえたのだった。有機的統一体としてのナロードはその出生の如何にかかわりなく、排他的自己肯定を克服した個人から成るべきである。古きインテリゲンチャの世界観にあって個の理念が薄弱なことは、そこにナーツィヤの理念が欠如していることと表裏一体をなしている。インテリゲントは意識して生活者となり、ナロードの内へ解消することにより、ナロードに有機性を取り戻させ、かつ同時にナロードの生活をより高次のものへと高めるべきである。

ベルジャーエフは古きインテリゲンチャがロシアの社会発展に対してなした肯定的寄与を評価しないわけでは決してない。インテリゲンチャの最良の部分がナロードの福祉に献身的に仕えたことはまぎれもない事実である。ベルジャーエフによれば、ナロードの有機的精神がロシア文学の内に現れているとするなら、有機的社会性の萌芽はゼムシチナ（地方自治）の内に見られる。ゼムストヴォ（地方自治体）はインテリゲンチャの没我的な活動に多くを負っているものであり、とりわけゼムストヴォの医師・教師などの間に偉大な精神資質を認めることには吝かでない。問題は「この階層によって生活の法則にまで持ち上げられた道徳的判断の誤りにあるものであり、この誤った道徳的判断は、たとえそれが道徳的気分というにすぎない場合ですら、悲しむべき結果を生ぜしめる」（同上、69ページ）。革命が自由と正義への渴望、神によって授けられた人権のための戦いとばかりでなく、ニヒリスチックな意識、無神論、人間の自己神化とも結びついており、そこに肯定面と否定面を見分けることがしばしば極度に困難であるように、ロシア・インテリゲンチャの思想と実践の内において善と悪は微妙に絡み合っており、これの判別は時として容易でない。19世紀ロシアの80年代はインテリ

ゲンチャの変質期である。1861年の農奴解放によって堰を切られたロシアの資本主義化は、工業面に比しての農業面の立ち遅れなど幾多の問題を残しつつ、ともかく急激な進展を見、ロシアにおける産業革命はほぼ1880年までに完了する。1881年のアレクサンドル2世暗殺に続く弾圧強化の時代、一部革命家たちは地下活動を続ける中で変ることなく古典的ナロードニキのニヒリズムとモラリズムの倫理を守り続けたが、政治闘争から閉め出されたインテリゲンチャの多くは日常的文化活動に向った。1864年以来多くの県に設けられていたゼムストヴォ、およびその活動によって運営されていた地方の学校、病院、その他の公共事業が、これらインテリゲンチャを吸収する地盤を用意していたからであり、このことは言い換えれば、ロシア社会があらゆる分野である程度の教養の持主に対する需要を大量に生ぜしめ、それにより多くのインテリゲンチャをロシア社会の土壤へ組み入れうる程度にまで成熟してきたことを意味した。たしかに20世紀の初頭、すでに多くのインテリゲントにあって、その実践が良い意味でその理論を裏切っていたことは事実であろう。しかしたとえ彼らの実践がロシア社会の有機的發展に添うものであったとしても、彼らの誤った世界観がこの有機的發展を根本から覆す可能性はあったのであり、ベルジャーエフはこれを危惧したのである。インテリゲンチャの思想と実践の齟齬とは、所詮その世界観の内なる齟齬であり、「意識の錯乱」である。この錯乱の性確をベルジャーエフはこう特徴づけた。

われらのインテリゲンチャは自由を尊びつつそこに自由の影も見られぬ哲学を説き、個性を尊びつつそこに個性のための場所はない哲学を説き、進歩の意義を尊びつつ進歩に意義を与ええない哲学を説き、人類のソボールノスチを尊びつつ人類のソボール

ノスチがありえない哲学を説き、正義と一切の高貴なことどもを尊びつつそこに正義をはじめ高貴なものも見出されない哲学を説いていたのである。これはわれらの全歴史によって形成された殆ど絶え間ない意識の錯乱である。インテリゲンチヤの最良の部分はいつなん時でも狂信的に自己の生命を投げ出したが、彼らはまたそれに劣らぬ狂言をもって、一切の自己犠牲を否定する唯物論を説いた。革命的インテリゲンチヤはいかなる神聖なものも認めない無神論哲学に熱中する一方で、この哲学そのものに神聖な正確を賦与し、自らの唯物論と無神論を狂信的に、殆どカトリック的に崇めた。(同上、189ページ)

VIII

1905年の革命騒動ののち、ニコライ二世は国民の要求に譲歩し、国会開設を約した。しかし1906年5月に招集された第1回国会(ドゥーマ)は政府の意に満たず、7月に早くも勅令により解散させられる。この国会については、これがナロードの意志の真の表現ではない旨の攻撃がとくに左翼からなされた。すなわち、この国会は直接・平等・無記名の総選挙によるものでないがゆえにナロードの意志の表現たりえないというのだった。しかしベルジャーエフに言わせれば、ドゥーマに完全なナロードの意志の現れを見ることができなかったのは、それが普通選挙によって選出されなかつたからではない。ナロードの意志の真の代表が存在しないのは、国民のソボルノスチが、超人間的統一が存在しないからであり、客観的精神としてのナロードそのものが見当らないからである。ドゥーマはまづいやり方ではあるがともあれあらゆる議会同様、アトム化せる時代のナロードの声を反映したのであり、その限りにおいてそれは最小の悪であった。これ以上の善のために

は、もはや政治的ではない宗教的性格の転換が必要なのである。

既に見たとおり、ベルジャーエフは立憲主義者でもデモクラートでもない。しかしこのことによって彼は現代政治と社会生活の外に立とうとするものではない。個人主義的な孤立と社会的無関心は彼の排斥するところである。戦術上の虚偽を自らの原理とする政治闘争、すなわち抽象的原理と化した政治の内に救いを見ず、立憲主義的デモクラシーの理想に有機的テオクラシーの理想を対置しつつ、ベルジャーエフは現実政治の上での立憲主義的デモクラシズムの相対的な正しさを認める。彼にとって宗教的社会性の理念とは、人々の宗教的結びつきに関する理想であって、何らかの社会機構のことではなく、また具体的に社会的な何ものとも結びつけえないものであり、それゆえ厳密には社会的理想とは言いえないものである。地上における神の王国の実現を具体的・社会的な意味で待ち望むことは、危険なマクシマリズムであり、歴史の外に立とうとすることである。立憲主義とデモクラシーが分裂せるナロード意志の反映にすぎず、有機的でなく機械的であるにせよ、この分裂状態と非有機性は事実であり、この事実を否定することは歴史を否定することであり、発展の苦しみを知らないに等しい。

この事実(分裂状態と非有機性)は困難で永い過程によって、すぐには満足な結果の得られない過程によって生き抜かれ、克服されねばならない。意識の内の転換は未だ実生活上の転換となっていない。歴史の苦しみを生む実在の非合理性を、常に思い起こさねばならぬ。この耐え難い非合理性は、世界の原初の墮罪に、神から離反したカオスが未だ克服されていないことの内に根ざしている。(同上、43—44ページ)

ベルジャーエフは、ロシアにおける抽象的政治の領域で立憲民主党（カデット）の内にはもっとも悪が少いと見る。すなわち、強圧の崇拜、現実政治の宗教化がこの党派にあってはもっとも少く、中立的な社会環境の整備という真実はもっとも多い。カデットたちは「黒や赤の悪鬼憑き」からは自由であり、このことはロシアの現状にとって貴重である。それゆえベルジャーエフはこれを支持する。しかしこの党派にも危険はある。革命家たちが革命を、反動家たちが国家を偶像に仕立て上げたように、カデットたちは憲法を偶像に仕

立て上げる可能性がある。革命、国家、憲法等の相対性・副次性を明らかにし、これらによつては抽象的政治原理が克服されえないこと、有機的社会性への渴望が満たされえないことを最終的に示しうるのは、宗教的意識のみである。立憲主義は未だこの宗教性からは程遠い。とはいえ、抽象的合法性と憲法への跪拝がいかに危険で虚偽に満ちていようと、極左の悪鬼憑きはもっと悪い。「ロシアは最小限の偶像崇拜をもって、立憲主義を生き抜かねばならない」（同上、44ページ）のである。

“Conception du peuple chez Berdiaev” (résumé)

AOYAMA Taro

Le peuple russe vit-il une vie organique et créatrice ? Berdiaev considère la société russe comme foncièrement malade à cause de l'absence de l'unité organique.

Le pouvoir d'Etat historique en Russie servit les instincts de la classe dirigeante, se détacha du peuple, de sorte que la société russe contestataire, représentée par l'intelligentsia, tourna le dos à l'Etat russe et en arriva à voir sa raison d'être dans cette désobéissance même. L'intelligentsia russe ne s'aperçut pas qu'elle avait tourné le dos non seulement à l'Etat mais aussi au peuple russe en tant que corps organique.

La notion de peuple comme unité organique, comme nation, n'a jamais été conçue par l'intelligentsia. Le peuple en tant que corps organique secret est une réalité mystique. Empoisonnée par le nominalisme positiviste, l'intelligentsia a nié cette réalité mystique, ce qui lui a suscité le désir ardent de l'union avec le peuple. Elle n'a trouvé d'autre voie que de prendre sous le nom du peuple quelque couche sociale particulière, paysans ou ouvriers, et de l'idéaliser telle quelle. Mais l'absolutisation d'une couche sociale particulière comme peuple est diamétralement opposée à la découverte du peuple comme porteur de l'idée organique. On ne peut compter sur aucune couche sociale particulière. Le salut ne se trouve qu'au-dessus de tous les conflits de classes sociales.

La couche sociale appelée habituellement intelligentsia s'oppose au peuple, mais elle n'est pas non plus un groupe de génies et de talents. Elle est incapable de comprendre la soif religieuse du peuple exprimée par les génies dans la littérature et la philosophie russes. Elle s'oppose donc aussi bien au peuple qu'aux génies. Or ce sont les génies et le peuple qui créent l'histoire et la culture, et il n'y a aucune contradiction entre eux. L'intelligentsia russe est un produit typique de l'histoire inorganique russe. En s'intégrant au peuple, elle doit faire recouvrer le caractère organique au peuple.

Berdiaev n'est ni constitutionnaliste, ni démocrate, mais dans la politique réelle il reconnaît la vérité relative du constitutionnalisme et de la démocratie. Certes, il exprime l'idée de la théocratie idéale, c.-à-d. de la réalité sociale religieuse, mais c'est un idéal sur la façon religieuse de s'unir des hommes. On ne peut pas l'attacher à rien de concrètement sociale. Il est un maximalisme dangereux d'espérer la réalisation du royaume de Dieu sur la terre sous une forme concrète et sociale. C'est à cause de cela qu'il soutient le parti constitutionnel-démocrate (Kadet), tout en s'apercevant du danger de ce parti : l'idolâtrie de la “constitution” tout à fait comme les idolâtries de la “révolution” et de l’ “Etat”.